

# 栄光

説教

## 『信じる者は救われるか』

ヨエル書3章1節～5節  
マルコによる福音書5章21節～43節

狩野進之佑

説教・「信じる者は救われるか」狩野伝道師	1
特集・聖霊の風に満たされる	2
説教・「神秘体験と私」岸牧師	6
伝道師の書き込み	7
牧師の書斎から	7
長老のファイル	8

今日の聖書箇所は、二つの話が

ひとまとめにされています。初めは会堂長ヤイロの娘の癒やしについて語っているのに、それに割り込むようにして長血の女の癒やし語られています。それに片がついた後、改めてヤイロの娘の復活について語られます。この二つの物語を重ね合わせているのは、同じ一つのテーマをマルコが見出し

信仰と奇跡とは、この箇所にお

いて深い関わりのあるものとして語られています。主イエスを信じた長血の女は癒され、主イエスを信じたヤイロはその娘を生き返らせてもらえた。実に素朴に信仰の勝利を描くものです。ですから、実に素朴に私たちもまた、これらの言葉を受け取ることが一番でありましょう。信じる者のところにこそ、奇跡はあるのです。しかしその上であえて申しますが、私の不信仰は、どうもこの物語を簡単に受け入れられない、というのが正直な感想です。本当に「信じる者は救われるか」。それが私にとってこの箇所を読むでの第一の感想です。私たちは実際には、信じていればどんな病気も癒されるということはありません。信仰者で

あっても、奇跡はいまだに奇跡のままです。その時限りの、歴史上ただ一回だけの、不思議なこととして奇跡は起こります。信仰で奇跡を起こすことはできるものではありません。

この信仰と奇跡について語る、ヤイロと長血の女の物語において、面白いと思うのですが、この信仰者たちは実に立派な、模範的な信仰者ではありません。深い信仰が奇跡を起こしたわけではないのです。長血の女など、実にそういう人だと思えます。この人の信仰はご利益信仰と言うべきようなものです。触るとご利益のある木とか像とかに対するものと、何ら変わることはない信仰です。ヤイロもやはり模範的な人ではないでしょう。この人は主イエスを信じることができず、娘が死んだと聞いて、もうあきらめてしまう人です。

人の信仰が奇跡を起こすものであるなら、信仰の強さはとても大事なことでしよう。しかし、信仰の強さは奇跡を起こしはしません。「どのように」信じるかの問題ではなく、「誰を」信じるかが

問題です。ほかのどこにでもなく、御子なる神、主イエスのところに奇跡があることを信じる。この信仰こそが人を救うのです。

どんなに願ったところで、その奇跡を神の手から強請り取ることはできません。神の奇跡を自由にする権利を私たちは持つていません。しかし、奇跡を起こす方を信頼することができます。この奇跡を起こす力を持つ神、御子なる神主イエス・キリストが、私たちの苦しみに立ち向かう方であることに信頼することができます。ほかでもないこの方の手にのみ、奇跡があると信頼することができます。この御子なる神キリストを、ただひとり奇跡を行うことのできる神を信じる者のところにこそ、奇跡はあるのです。

本日はペンテコステ礼拝です。教会は、このただ一人奇跡を起こすことのできる神がごなたかを伝えるために集められました。それを伝えるために、永遠の命という最高の救い、最高の奇跡を頂き、神の霊さえも与えられたのです。「信じる者は救われる」、私たちこそ、その保証人なのです。

# 聖霊の風に満たされる

聖霊は目には見えないけれど、神様の力が風のように、空気のように、私たちの間に働きかけています。様々な不安を抱えながら日々生きている私たちですが、どんな時に私たちは神様の力に押し出され、神様の恵みに包まれるのでしょうか。



## 正しく畏れる

尾崎幸子

コロナが蔓延し始めた2月下旬、友人が「コロナは目からもうつるらしいから、私、外に出るときはできるだけ目を開けないで薄目で歩いているの」と言った。しかも結構大真面目に。「いや、目からもうつるけども、それよか普通に飛沫を浴びない距離を保てばいいだけでない？」とすかさず突っ込んでしまった。今思い返せば笑い話なのだが、当初はコロナに対してどうするのが正しいのか情報が錯綜していたから仕方ないのかもしれない。新情報を得るとどうしてもそれに目が行きがちで、それで基本的にやるべきことが疎かになつたりした。トイレットペーパー騒動や納豆万能説はそうやって生まれたんだろう。こういう異常事態のときは通常よりも、正しく知ることがまず求められる。

現代社会は知識基盤社会なので、異常事態になると普通、社会

は近代科学を基盤とした知識提供者、つまり専門家から情報を得ようとする。が、何にせよ未知のウイルス。専門家だって「こうしたウイルスはなくなりません」と言えるはずもなく、明確には答えられない。感染する怖さ、見えない怖さ、そこに加わるわからないという怖さ。そう理解できていても、怖さの3乗によって怪情報に踊らされそうになる。そしてそうなっている自分に気づくと啞然とする。人知に頼って生きている現実と、愚か者は自分が正しいと思ってしまうということを思い知らされるのだ。人知を超える方がいらつしやるというのに、である。

コロナによって人の生活様式もだいぶ変化した。幸い、我が家は誰もコロナにかかることも、仕事がなくすることもなく、多少の愚痴を言う程度で、不自由のない生活が送れている。これこそがまさに聖霊の力。感謝である。私たちは何を畏れるべきかを知っている。この本当の主の恵みにより頼み、コロナを正しく恐れ、共に暮らす新しい生活を送っていければ、と思つた。

## 自然の恵みのなかで

門田由紀子

新緑の美しい季節。朝、窓を開けてまず目に留まるのは家の隣に茂る木々たち。木の間を通り過ぎる風に朝日を浴びた木の葉がきらきらと揺らぎ、それは神秘的な美しさ。大きく深呼吸をして、今日も頑張ろうという気持ちにさせてくれます。

友人に誘われ、3年前からノルディックウォーキングを始めました。フィンランド発祥の、ポールを突いて歩くノルディックウォーキングは、クロスカントリースキーの夏場の練習用だったものを一般向けに改良したスポーツです。膝や腰への負担が小さく、全身の筋肉をバランスよく使えることから、様々な年代に親しまれています。森や里山、公園などを10kmから20km、自然を楽しみながら歩いています。

耳を澄ますと聞こえる鳥のさえずりや、頬を撫でる風に薫る木々

のにおい、野に咲く花々を目にしたとき、ふと「思い悩むな」(マタイ6章)という聖句が思い浮かびます。日々の暮らしの中で、戸惑いや苦しみ、予想外の出来事に慌て、小さなことに、くよくよと思いつくことの多い私です。でも、大きな自然の中に身を置き、四季折々の美しさに触れていると、大きく感じていた悩みも小さく思えてくるから不思議です。

礼拝で御言葉を聞き、祈り、自然に触れる時間を持つことで、いつの間にかその時々に乗りに越えるための力が与えられていることに気がつきます。自然は神様が創造したのだから、自然を通して神様が語りかけてくれているのかもしれない。目には見えないけれども、心のうちが聖霊の風に包まれて今日も前に進んでいると感じています。

最近読んだ『NATURE FIX』(フローレンス・ウィリアムズ著)には、いかに自然が私たちに良い影響をもたらしてくれるかが書かれています。自然に対する意識を変えてくれる一冊でした。

自然の恵みに感謝して。

## 主のまなざしの先に

岸 恭子

聖日の朝、礼拝堂の全ての窓を開けると風が吹き抜けて、一瞬にして空気が変わる。聖霊が降って誕生した教会は、恐ろしいウイルスが支配している暗い世界にあって、礼拝のみ言葉を通して私たちに慰め、癒やし、立ち上がらせてくださることを心から願う。

緊急事態宣言後、平日の祈禱会や集会は休止となったが、私自身の生活はあまり変わってはいない。3日ぶりに買物に行くと、売場の床にビニールが貼ってあり、それを辿って進むうちに、長蛇の列の最後尾にやっ行き着く。順番待ちもしんどいものだ。列の後方からレジ係の人に文句を言う人。並び方を間違えて戸惑っている高齢の人に「後から来たのに」と囁く人。先の見えない不安の中で、人々の心も揺れているのだろう。

主イエスのたとえ話の中に『どう園の労働者』(マタイ20・1)

の話がある。ある家の主人がどう園で働く労働者を雇うため、1日1デナリオン(1日の生活費)を約束し、数回に分けて雇い入れる。朝9時に雇われた人々と夕方5時に雇われた人々の間には労働時間に大きな差がある。しかし、主人から払われた賃金は全て同じ。普通に考えれば不公平な話である。先に雇われた人々の側からすれば納得のいかない話で不平を言う。

このたとえ話は私にとって長い間、間違った受け止め方をしていた箇所だ。「早い者勝ち」という風潮に優越感を感じ、働きの遅い者が同じ評価を受けるのはおかしいと思ってきた。しかし、この物語を繰り返し読んでみると、主イエスのまなざしの先にいるのは、憐みを乞うしかない、最後に雇われた人々だったことに気づかされる。このたとえ話の深く豊かな世界に触れて、心が新しくされたことを嬉しく思う。

「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ14・26)。

## 聖霊の風に満たされる

志磨 恭子

このタイトルで思うのはやはりペンテコステのことです。弟子たちの上に聖霊が注がれ、世界中に教会が出来ていくという奇跡は、弟子たち、そして私たちすべての者に聖霊が注がれ、キリスト者として生きていくことをゆるされるという奇跡に繋がります。

私は昨年末から腰痛で約2か月半も礼拝を守ることが出来ませんでした。年齢的にも体型的にも私の背骨は無理を重ねて、脊柱管狭窄症という病気になっていました。そのせいで起こった腰痛でしたので、再発の可能性も高いということで手術を受けました。皆様にはご心配をおかけしました。まだ完治したわけではありませんが、その間に国内だけでなく、世界中で新型コロナウイルスが広がり、入院中もスマホのニュースでビックリするような話を知り、不安を覚えました。

そうした中で、私たちはどうすればいいのかを考える余裕もなく、流されて過ごしていることに気がつかされます。

国内外の多くの教会では、礼拝に出席するために会堂に集まることも難しくなっているそうです。私たちの教会では徒歩、自転車など、ほかの方と接触の少ない方を中心に、いつもの三分の一位の人数で礼拝を守っています。そして、先生方のご努力でネットでの礼拝を配信しています（と言ってもまだ完全ではないのですが）。家族でパソコンの前に集まって讃美歌を歌い、祈りをささげている方もいらつしゃいます。一人で祈っている方もおられると思います。場所は違っても同じ時間に神様を賛美できることは感謝です。私たちの上を聖霊の風が吹き抜け、私たちが聖霊に満たされるというのには、どんな時もみんなが神様を見上げて神様に示された道を進んでいくということではないでしょうか。

今、こんな時も、これからも、神様が私たちの信仰を強めてくださいますように。

## 聖霊に導かれて

永井 茅子

初夏の気配の中、新型コロナウイルスの影響で、私たちは体調管理のため自ら検温、マスクをして、他人との距離まで気にして行動しなくてはなりません。公共交通機関でしか教会に行けませんので、今まで経験のない動画での礼拝を守ることになりました。物心ついた頃から日曜学校に通い、何も無い時代にそのことを唯一の楽しみに日々を過ごしておりました。40才の半ば、この教会に導かれ今に至りますが、礼拝堂での礼拝に参加出来る日を待ち望む日々です。少し前になりますが、亡くなった父が受洗に至った時の話です。晩年父が「茅子、僕は神を信じて生きて行きたい。家族の皆といっしょに、ね」とポツリ。学生時代美学専攻、仏像と慣れ親しんでいた生活でした。父のお伴でよく奈良に足を運んだものでした。変わった趣味を持ち、マイペースに生

きてきた人が自身が罪人であったことなど告白するはずがないと誰しも思っていましたから。間もなく受洗に至りましたが、この時ばかりは本当に聖霊のとりなしがなければ起こらなかった出来事でした。爽やかな気持ちになりました。一番嬉しかったのは母だったと思います。病いとの戦いの中でも平安が与えられました。

聖霊が注がれたのはペンテコステの日。イエスが十字架につかれ復活されて50日目に弟子たちが聖霊を受けました。が、全員ではなくひたすら待ち続けた者だけに注がれたと。聖霊が降らなければ聖書の御言葉は虚しいものになり、信仰生活の上に本当の力を得ることも出来ない。聖霊によらなければ誰もイエスを主と仰うことは出来ないとも教えられています。

私たちの理性や知識を超えたものである聖霊の働きを信じ歩んでいきたいと思っています。エル・グレコの聖霊降臨の絵を思い出しつつ、時に自分の絵の構想を考え、非日常の生活を送っているわけですが。常に神に喜ばれる日々であるようにと祈るばかりです。

## 空気のような聖霊

萩原和子

「聖霊は目には見えないけれど神様の力が風のように、空気のように、私たちの間に働きかけています」。

これは原稿依頼文の冒頭の記述ですが、私は本当に同感です。「そして私たちの心を暖める」と附記したいのです。

礼拝堂に入った瞬間に自分の頬が緩むのを感じます。日曜日に心も身体も暖かくなって帰宅し日常生活に戻りますが、暖かさが少しづつ冷める感じが残念です。「空気」も「風」も目には見えませんが、確かに体感します。呼吸しなければ私たちは生きていられないのですから。

空気も風も、吸う人の国籍、人種、性別、年齢による違いはありません。しかし卒寿を迎える私の子どもの頃は、男・女の別、人種による差が今より顕著だったと感じます。軍事大国と自称していた

日本が敵国アメリカに敗れ、それから軍隊を持たない国家になったのは聖霊のお働きだと感謝しています。日常生活の様々な不安や悲しみも、教会でお説教を伺うことで癒やされ、新しい日々を歩み始められます。

初めて私が教会の席についたのは札幌で小学校1年の暮でした。未信者の父・母と並んで腰かけ、暖かさを感じました。その後牧師先生が時々来宅され、父・母に聖書のお話をなさいました。私は離れた所から眺めていましたが、将来の受洗に向けての聖霊のお働きだったと信じています。

上京して経堂に住み、登下校の時目にした「経堂北教会」の看板が女子大卒業時の受洗に繋がりました。母・父も聖霊のお働きにより、それぞれの決心がついた時に受洗しました。

召天者記念礼拝の時、礼拝堂の三面に掲げられた額を眺めながら、お一人おひとりが吸ってこられた空気のような聖霊のお働きを思います。

「目には見えない聖霊の風に吹かれる日々」を祈ります。

## 静かにささやく声を聞く

原 由佳理

昨年のGW前後に白内障の手術を受けた。急を要する程ではなかったが、改元に伴う10連休は休養し易かったし、何より、同居する義母の体調が至極良かった。「これぞ好機」と、教友に聞いた医院で相談し、手術日が決まったその途端、崩れるように視力が落ちてびっくりした。幸い、術後の経過は順調。まさか約半年後に義母を見送ることになるとは、あの医院が閉まるとは、また今年、コロナ禍で白内障手術を延期する病院が出るとは、予想だになかった。

このように思わぬことがあると、つい偶然を超えたものと捉えたくなると、危うい。心理学では、自分に関わる事柄を過度に楽観的に見る「ポジティブ幻想」が精神的健康に役立つという説があるが、弱い信仰が幻想に寄ってしまう。はじめに主の御旨があり、聖霊の助けで御旨を求め祈るはずが、先に自分に都合の良いことを見つけ、それを導きとみなす。目的を自分に向けて主客転倒の隙があるのだ。

ただ、神様の御計画は人には計り知れず、聖霊の声も正しく聞き分けられないことが多いかもしれない。難しいなと思う。

しかし聖霊は、一人ひとりの弱さを全て知った上で執り成してくださる。他人とも親とも共有できない悩みや神様から離れてしまった苦しみを受け止め、寄り添ってくださる。また、誤りを正される。下の子が小学校の頃「授業で音読すると気の毒な位、つかえませ」と言われた。その子に、とイヴ礼拝での聖書朗読を勧められたので、咄嗟に「無理です」と答えた時、「神様の御用を断るものではない」と諭されたCS担任、現校長の真っ直ぐな声。振り返ると折々に、主を指し示す聖霊の恵みがあった。

私たちは今、大きな不安と苦しみの中にある。コロナ禍は人の繋がりを阻み、差別を生み、弱い立場の人を置き去り、社会の分断を引き起こす。御心は見ることでできない。けれども、主は小さな私たちを選び、贖われた。それぞれの場合から主の平安に祈りを合わせ、聖霊の静かな声を逃さないように耳をすましていたい。

## 説教

## 『神秘体験と私』

エゼキエル書8章1節～4節  
コリントの信徒への手紙二12章1節～7前半

岸 俊彦

パウロは自らの生まれと務めを誇り(11・22,23)、苦難を誇り(同23～29)、神秘体験を誇りました(12・1～7)。神秘体験は天空旅行とも呼ぶべき超人間的体験でした。「弱さ以外には誇るつもりはありません」(12・5)と言ったのですから、誇ることは愚かで無益なことと分かっていました。

もともと神秘体験に関心のあったコリント教会の人たちは、彼らの手に落ちたままとなってしまう。ただ、神秘体験が人生の基礎、教会の土台とはなりません。

使徒としての根拠は、決してパウロの神秘体験にはないからです。反対者たちは、神秘体験を使徒の根拠としないことを(あるいはできないことを)、パウロが使徒でないことの証拠としました。

パウロはみ声を聞きました。パウロを過大評価したり、貶めたりしないで、今のパウロのありのままを見てほしいのです。ありのままのパウロに注がれる主の恵みを見てほしいのです。パウロを通して、使徒としてくださった主に目を向け、主のみ声を耳を傾けてほしいのです。主の恵みによって今日のパウロがあります。本当に自分は何も誇ることはありません。あ

「弱さ以外には誇るつもりはありません」(12・5)と言ったのですから、誇ることは愚かで無益なことと分かっていました。

自らの神秘体験を誇ることは愚かで無益だとわかっていますから、あたかも他人の体験であるようにパウロは語りました。慎重に言葉を選び、その神秘体験は主が見せ、啓示してくださったと語り

しかし、パウロの反対者たちに優るとも劣らないどんなに素晴らしい体験だろうと、そのことをもって、パウロが使徒とされている根拠がそこにあるわけではありません。14年前の忘れることのでき

の主を誇ることのみです。パウロが伝えたいことは、言葉にすることもできない素晴らしい天空旅行のことではありません。この人生という地上の旅で、それこそどん底で、もつとも自分が弱いときに主が語ってくださったこととです。主が共にいてくださったことです。

コリント教会の人たちは神秘体験に関心があったようです。さまざまな霊的な賜物があります(1コリント12～14章)。その中には異言が重んじられたようです(同14・2)。「人が口にするのを許さない、言い表しえない言葉」(12・4)です。そうした神秘的な体験を、パウロの反対者たちはキリストの使徒であることの根拠としました。彼らの誇りとなりました。神秘体験は、パウロにとっては使徒の根拠ではありません。しかし、対抗上彼らと張り合わないとい

見せ、啓示してくださったと語りました(12・1)。パウロの神秘体験で大事なことは、あまりにも素晴らしい体験をした(12・7)ということではありません。第三の天にパラダイスまで引き上げてくださったのは神だ、ということとです。自分の力ではありません。パラダイスは神とキリストがおられるところです。義人はこの地上の旅を終えてパラダイスに迎え入れられます。天空旅行でパラダイスまで引き上げられたパウロ

「肉体のとげ」こそパウロの使徒としての根拠です(12・7～10)。神秘体験や超人間的天空旅行で、パウロはみ声を聞いたのではありません。この地上での使徒としての試練の中で、苦難の中で、コリント教会の混乱の中で、山あり谷ありの日々の暮らしの中で、

日々、使徒として苦勞する中で、パウロは「キリストの福音を人から受けたのも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされました」(ガラテヤ1・12)。主の御言葉こそ、パウロが使徒として立つ拠り所です。

## 伝道師の書き込み

最近、ちょっとした困りごとがひとつあります。声がうまく出なくなってしまう。幸い、風邪などではありません。単純に、声を出す機会が減ったからではないかと思います。人間、使わないものはさび付いていくものだと実感しています。

緊急事態宣言発令後も幸いなことに私自身の生活様式は大きく変わっていません。教会は徒歩圏内

にありますし、仕事中に三密になるということはありません。以前と変わりなく週日も教会に顔を出しています。内外問わず集会のひとつもありませんし、会議などでもできないため、この2ヶ月は驚くほど静かでした。私は1人でいることも、部屋にこもっていることも全く苦にならない人間なので、そういう私の性格も手伝って、今思い返すと本当に一言もしゃべらないで1日を終えることもしょっちゅうだったと思います。

5月に入ったあたりから、いつ

ない方も教会のことを覚えてくださっていることを改めて知ることができました。

礼拝のライブ配信については、以前長老会で検討課題となったままでした。今回は諸事情から礼拝に出席出来ない方の要望を受けて、緊急に対応することになりました。CSも礼拝を録画して配信しています。映像はともかく、音声は1階で礼拝しているのと同じ程度になりました。ネット設備のない方には、要望に応じてCD、説教原稿を送っています。

も通り讃美歌を歌っているのに、どうも声がうまく出ずにつかえることが多くなりました。いよいよ近頃は挨拶を返そうと声を出したつもりが、かすれて声にならない、ということもありました。コロナ自粛の中で、自分がインドア派であったことを多分初めて感謝したのですが、思わぬところから困らされることになりました。

非常事態宣言が解除されて、ようやく週日の集会も、3月以前と同じようにはいけません。ス

讚美歌は著作権によってかなり選曲が狭められますが、暫く続けて改めて長老会で協議します。

ライブ配信によって、説教が変わっているわけではありませんが、目の前の会衆だけではなく、ネットを見ながら礼拝している方がいるということを意識させられます。普段礼拝に出席していません。普段礼拝に出席していません。ご家族も礼拝しているとも聞きます。ごくごく限られた経堂北教会の礼拝堂で語られる説教は、本来世界に向けて語られていることに今更ながら気づかされました。

パルタ式、というほどでもないでしょうが、祈祷会はしばらく私の声のリハビリの時間にもなりそうです。神様からせつかくいたしたい、神様を賛美する口ですから、少しはさび取りしておきたいものです。

(狩野進之佑)



## 牧師の書斎から



教会総会が延期されたため、問安委員会で最近お見えでない方へ教会総会資料などを一齐に送ってくださいました。例年より緊張感をもって総会に出席してくださいさることでしょう。そのおかげで思いがけないメールや手紙もいただきました。献金のことを心配してくだされた方もいます。そのため週報には教会の口座を記しました。礼拝に出席できる方も、そうで

名優山本安英は舞台で演じるとき、劇場の一番奥までの円と、その外側の円(世の中)まで二重の円に届くようにと語っています(『女優という仕事』)。そんなことを思い出しながら、まっすぐに説教者に注がれる眼差し背後にある世界を改めて意識させられています。そして、それぞれの場から見上げる天の声に共に聞かなければと自覚させられます。礼拝後は自宅でもう一度、今度はテレビ画面を見ながら礼拝しています。

(岸 俊彦)

## 個人消息



## 掲示板



- 教会初夏の集い 6月21日(日) 午前10:15  
説教「死は命に飲み込まれる」  
2コリント5:1-5  
講演「キリストの体の肢体として」  
ローマ12:1-5  
青木 豊 牧師(日本キリスト教会高知旭教会)
- 教会総会 6月28日(日) 礼拝後～午後1:00  
※昼食の用意はありません。

## 編集後記



- ▽6月号は掲載できる集会報告などがなかったため、説教がダブルの喜びの誌面となりました。ペンテコステの特集と併せてお届けします。(沢田)

「栄 光」2020年6月号  
日本基督教団 経堂北教会  
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11  
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038  
牧師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑  
編集：栄光編集委員会  
Email：kyodon@nifty.com  
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

## 長老のファイル



新型コロナウイルス感染症蔓延で日本全国に非常事態宣言並びに外出自粛要請が出され、約1ヶ月前。国民の献身的な行動自粛が功を奏し、ようやく全国的に宣言が解除され、少しずつ日常が戻りつつありますが、いかがお過ごしでしょうか？ 皆様の健康が守られて無事にまた教会で礼拝を守れる日が訪れることをお祈りします。この未曾有の感染症拡大の中、岸

先生主導のもと長老会では早期からその対応を決め、礼拝の最小限での実施、各集会の休止、教会学校の休校、礼拝のライブ配信、定期教会総会の再度延期等を実行してきました。現時点で経堂北教会から感染者が出ていないことは何よりも感謝の念に堪えません。定期教会総会は6月28日に延期されましたが、そこで新年度の長老選挙が行われるため、それまでは現任の長老が任期延長にて、それぞれの役目を果たして参ります。この状況の中でも長老会は毎月欠

かさず、それぞれの着席の間隔をあけ、礼拝直後から時間短縮で行われています。各当番もこのメンバーで6月末まで担当します。コロナ後の対応については、状況に応じて徐々に集会を再開していくことになるかと思いますが、これまで我々が自己防衛のために学んできた基本的な公衆衛生上の動作、すなわち手洗い、うがい、マスクの着用、ソーシャル・ディスタンス等は意識しつつ継続し、経堂北教会においても気を緩めることなくこの感染症との戦いに勝

利していきたいと思います。感染拡大が収束しつつあるとはいえず、第2波、第3波の襲来が懸念されています。今後も感染者・濃厚接触者が出た場合、そのリストアップ、教会員への連絡、消毒、閉鎖などのプロセスが徹底できる体制を維持できるようにと長老会でも話し合われています。また笑顔で皆さんと共に礼拝を守れる日が1日でも早く来ますように。それまで、またその後もご自身の健康をどうぞ第一に考え、お過ごしください。(大西 順)